
【FFX-2】 太陽の昇る瞬間

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【FFX-2】太陽の昇る瞬間

【Nコード】

N4532U

【作者名】

リン

【あらすじ】

自サイトから持ってきたものです。

FFX-2の現代パロディ作品です。ティード×ユウナ要素ありです。

この作品内では二人とも大学生で、ティードはサッカー推薦で入学するぐらいサッカーが得意、ユウナはお嬢様という設定です。

※サイト内で行った企画（提供していただいたネタを書く、という内容です）で書いたものなので、世界観の設定はあまり深く行っていませんへへ；

(前書き)

ティーダ×ユウナ要素があると、現代パロディ仕様なので苦手な方はご注意ください。

『家のことなんか関係ない！　ユウナはユウナだ、ユウナ自身の気持ちがあるならそれを貫き通すべきだって！』

——その言葉が、今のわたしを作り上げてくれた。
あなたのおかげで、わたしは今、ここにいます。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「じゃあまたね、ユウナん！」
「うん。バイバイ、リュック」

従姉妹に手を振り返して、ユウナは待ち合わせ場所の正門に向かった。途中たくさんの視線を——いつものことなのだが、それ以上だ——感じて思わず首を傾げる。セミロングの栗色の髪が動きと微風に合わせて柔らかく揺れた。

ユウナの通うスピラ大学は多様な学科を設け、文武共に優れた者を数多く世に送り出している全国でも有名な大学のひとつだ。四季の変化を肌で感じられる自然が学内に溢れているのも特徴として挙げられている。

季節は二度目の春を迎えている。干したての布団に包まれている時のようなぬくもりを身体いっぱいを感じる事ができて四季の中では一番好きだ。

正門をくぐり抜けた直後、視界の端に目的の人物を見つけてユウナは顔を輝かせた。小走りにその人の元へと迎う。

「ティーダ！」

振り向いた彼は、どんな太陽よりも眩しい笑顔を向けてくれた。

$$\begin{array}{c} + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \\ + \end{array}$$

「ユウナ、ホントにオレの部屋でいいの？　女の子が喜びそうなの
何もないよ？」

「うん。わたし、キミの部屋ってずっと見てみたいなって思ってた
から」

ティーダの頬が心なしか赤く染まった。そんな彼が可愛く見えて、
ふざけ半分で腕に抱きついてみる。見上げた顔はますます赤くなっ
た。

このような関係——恋人同士になってから三ヶ月以上が経つ。今
まで好きな人すらできたことのなかったユウナには恥ずかしさが抜
けて自然に振る舞えるようになるまで結構な時間を要した。普通な
らそこで飽きられてもおかしくはないのにティーダは焦らず待って
くれていた。そんな優しさが嬉しくて、愛しい。

「そういえばユウナ、新入生からもうウワサの的になってたッスよ」
「えっ！？　そ、そうなの？」

「……もしかして気づいていなかったとか？」

「う、うーん……なんか、いつもより見られてるなあって感じが強
かった、けど」

もしかしてこれと関係しているのか。その推理は見事的中したよ
うだ。

「それはまぎれもない新入生のが混じってんだよ！　もう、どうし
て気づかないんだよ！」

「そ、そっか。うん、ごめん」

迫力に押されて思わず謝ってしまった。

「相変わらずユウナは人気あるんだなあ……だけど仕方ないか」

あまり自覚がないのだが、どうやら自分は「もてて」いるらしい。
確かに恋人ができる前は結構な数の男子から告白を受けたこともあ
ったがさして気には留めていなかった。

肩を落としている様子のティーダに少しでも元気になって欲しく
て、抱きしめた腕に力を込めた。わずかな震動が伝わり、癖のつい

た金髪が振り向いた衝撃で輝きながら一瞬持ち上がった。

「わたしには、ティーダだけだからね」

「ユウナ……」

「だから心配はいらないよ。だい」

不意に唇を掠めた、温かなぬくもり。

呆然としたユウナの瞳をしてやったり風に笑ったティーダが埋め尽くした。

「ティ、ティーダ！ こ、こんな、道の真ん中で！」

「ユウナのせいッスよ？ 可愛い上に嬉しいこと言ってくるから」

「——もう！」

頬を膨らませてそっぱを向いたがきつと彼にはわざとだとわかってしまっているだろう。耳に届いた微かな笑い声が何よりの証拠だ。それが悔しくて腕を外し、一人で先に歩き出すとティーダは本気で焦り始めたらしく、情けなく名を呼んできた。

思わず零れた笑みは、心地よさを与えてくれた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

幼い頃は何とも感じなかった「家」に苦痛や圧迫感を覚えるようになったのはいつからだったろうか。始まりは思い出せない。それほど長い間、自分は「家」という名の檻に縛られていた。

世間で言う「お金持ち」の家に生まれた自分は「お嬢様」の称号を得たと同時、支配されることとなった。内でも外でも常に称号を通して見られていることを意識した瞬間から自分は「ユウナ」という顔を称号で作られた仮面で覆い隠した。

内の人間の期待を裏切ってはならない。

外の人間のイメージを崩すような真似はしてはならない。

当然長く続くはずがない。限界は訪れる。それが……大学生活が始まってから、だった。

自分のような人間とごく普通の人間とでは、いくら外見を偽ろう

としても生まれつき身に纏っている衣が目に残れば興味本位のそれへと変わる。また、仮面を被る場が現れる。

仮面の中の素顔は醜く歪んでいた。悲鳴を上げたいのにできなくて、解放されたいのにできなくて。

——嫌だったのだ。家が敷いたレールの上を黙って歩くのは、本当はとても嫌だった。

家自体を嫌悪しているわけではない。父母は厳しいながらも優しいし、姉のルールー、兄のワツカを始めとした人達も一番に自分を考えてくれる。大切な人達が溢れた場所だ。

だから……それゆえに、辛かった。

自分の想いを吐き出そうとするたび、その大切な人達の顔が脳裏をよぎった。笑顔が悲痛に変わる瞬間がスローモーションで流れ、終わる頃にはすっかり気持ちちが殺がれてしまう。

想いを伝えたい。

大切な人達の悲しむ顔を見たくない。

相反する本心は確実な勢いで神経を食らっていった。

——闇を退ける光が自分に降り注いだのはその時だった。

+++++

ティーダの家は驚いたことに徒歩三十分ほどの場所にあった。本人曰く「近い方が楽だから」らしい。サツカー推薦で入学したとはとても思えない台詞に、それでもティーダらしさが表れていてユウナは笑ってしまった。

「何か、ユウナの家に比べたら全然狭いと思うけど……」

苦笑して頭を掻くティーダに慌てて首を振る。

「そんなことないよ！ 何か……とってもあったかい感じがする」
門前に立つだけで伝わってくる、家全体の雰囲気。ティーダに似たぬくもりがここには一面の花畑のように溢れていたのだ。

門を、玄関をくぐり抜けるとすぐ右にある靴箱の上には小人の小物――七人いるところを見ると『七人の小人』をモチーフとしているのだろうか――が飾られていた。可愛いね、と褒めると母親の趣味なんだ、と照れながら説明してくれた。その母親は今出かけており、夜までは帰ってこないという。

すぐ目の前にあった階段を上り、正面の扉が開いた先にティーダの部屋があった。

「あの、昨日頑張って片付けたんだけど、あんまキレイにならなくてさ。ごめんな」

とりあえず腰かけて、と促されたクッションの上に正座をして、入ってきた時と同じように周りを見回す。

「飲み物とか持ってくるけど……ユウナ、恥ずかしいからあんまきよろきよろしないでくれよ？」

頷いてはおいたが効果がないことは自らが証明していた。

オレンジと青中心で構成された室内は真夏の青空をユウナに連想させた。ベッド脇に置かれた本棚にはざっと見る限りサッカー関連のもので埋まっている。そのまま正面へと視界を滑らせたユウナはテレビの前に置かれた長方形の青い物体を見つけて首を傾げた。これは何だろう。機械か何か、だろうか？ 募る興味心に従って顔を近づける。

そこで、背後の扉が開く音がした。

「ユウナ？ 何してるッスか？」

「あ、ねえティーダ。これ、何？」

飲みものとお菓子の載った盆をミニテーブルに置いたティーダは少し意外そうに目を見開いた。

「ユウナ、これ知らないのか。えーと、ゲーム機だよ。宣伝とかで見ない？」

「ゲーム、機？ ああ、言われてみれば確かに見たことあるかも……。色はこれと違ってたかなって思うんだけど」

ゲームとは無縁の生活を送っているため詳しくは知らないのだ。

「そっか、これがそうなんだ……」

見つめている内に好奇心が湧いてくる。このような娯楽は限られた数しか知らないし——大体が金持ち間で流行しているものだ——何よりティーダと共通した趣味を持ちたかった。

「ユウナ、何なら試しにやってみる？」

「いいの？」

そう返した声は自分でもわかるくらい、弾んでいた。ティーダは幼い子供を相手にしているかのような笑みを零すとテレビの横に移動してごそごそと漁り始める。

（もう、子供扱いして……）

悔しかったがその感情だけではないことも当然自覚していた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ゲーム、というのは慣れると案外簡単だった。

ティーダの言うところによると「格闘ゲーム」と呼ばれるジャンルのソフトをプレイしているらしいのだが最初は操作方法に戸惑いこそすれ、今となっては単純に楽しい。

「ああっ！」

隣から悲鳴が上がると同時、画面の中のキャラクターがゆっくりと倒れていく。残った女キャラクターは嬉しそうに勝利のポーズを決める。

「やったあ！」

喜びのあまり両手を挙げると大きな溜め息が耳に届いて、笑顔を苦笑に変える。

「もうこれで五連敗だよ……ユウナ、本当に初めての人の？ 何だか全然見えないッスよ」

「もちろんそうだよ。わたしゲーム自体全然知らなかったんだから」なぜなのかはわからないが、コツを掴み出した途端に驚きの勝利ラッシュを迎えていた。特別なことは何もしていない。ただパンチ

をしたりキックをしたり、苦勞して覚えた必殺技を繰り出しているだけ。原因は全くの不明だ。

「もしかしたらユウナ、これの才能あるのかもよ？ 今度買ってみたら？」

それでもなくてもっと面白いゲームはたくさんあるし。

言われてユウナはゲーム機を食い入るように見つめた。このような楽しいゲームが他にもまだたくさんある……。

「ねえ、これっていくらくらいするの？」

「え？ そうだなあ……確か二万くらいするかなあ」
「そんなにするの！？」

思わず目を見開くとティーダになぜか笑われた。

「どうして笑うの？」

「いや、何だかお嬢様らしからぬ台詞だなあって思っ

あ、と反射的に口元を手で覆う。

ユウナはここ一ヶ月ほど近くの喫茶店でアルバイトをしている。

自分の小遣いを稼ぐためと「外」をもっと知るためだ。

もちろん家には使っても使いきれないくらいの財産がある。けれど自らの足で人生を歩む道を取ったから、自分でできる限りのことはやりたい。

「――ティーダの、おかげだからね」

ごつごつとした片手を両手で包み込む。

「あの日、ティーダがわたしに勇気をくれたから、わたしは自分の道を選ぶことができたんだよ」

『あなたになんかわからない！ わたしの、わたしの苦しみなんか……！ 勝手なことばかり言わないで！』

『勝手なことばかり言ってるのはユウナだろ！？ 今のユウナはただ逃げてるだけだ、家とか立場とか、そういうのを盾にして逃げるだけだ！』

『……！！ っちが、わたしは』

『オレは確かにユウナの気持ちとかはわからない。だけどこれだけは言える。家のことなんか関係ない！ ユウナはユウナだ、ユウナ自身の気持ちがあるならそれを貫き通すべきだって！』

目が覚めた。真っ暗だった目の前が急激に開いた。

その感覚は今でも鮮明に残っている。

ティーダの言葉がなければ、自分は未だ同じ場所をみつともなく逃げ回っていた。建前を並べるだけ並べて敵と向き合うことを恐れたままだった。

「本当にありがとう、ティーダ。……大好きだよ」

身体を寄せて、無防備の唇をそっと塞ぐ。自分から口付けるのはまだ恥ずかしくて慣れないけれど、何だか幸せになる。

「——オレも大好きだからな。ユウナ」

すぐに返ってきた口付けのあと囁かれた台詞は、顔から火が吹き出たのではないかと錯覚するほどの熱を生んだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532u/>

【FFX-2】太陽の昇る瞬間

2011年10月9日07時29分発行